

尊敬

「尊」とは、积尊の天上天下唯我独尊の尊であり、「敬」とは、聖徳太子の憲法の、篤敬三宝の敬である。

尊敬の文字は、人間の心におこし得る最も貴き情操の一つでなくてはならない。そして、それらの文字は、人間の深い宗教的自覚を現す文字ですらある。人間の一番劣等なものが、誰にも尊敬せられず、誰をも尊敬しない。

「三宝を恭敬し、師長に奉事す」とは、法蔵菩薩の御心である。

仏道は唯、仏法僧の三宝を恭敬するところに、善知識につかへまつる所のみ、開かれる。

如何なる人間といえども、他人からの尊敬を求めない者はいない。侮辱されることを嫌がるのはこの心である。

しかし、尊敬は求めても、尊敬しようとはしない所に、我の塊としての凡夫がいる。人を尊敬せずして、自己に対して尊敬をほらうべきを求めるは、悪党の心理である。この種の人は、その人の前においてのみ頭を下げれば、得々とする。

尊敬される人必ずしも尊くはない。しかし尊敬する心の中には、尊いものが動いている。

相当の年になり、相当に生き、相当に何かをすれば、必ず誰かに尊敬されるものがある。

しかし、私は決して、み法以外の何物を持っても尊敬せられてはならない。

何にあれ、真剣に生き、真剣に歩み、生きることには忠実であれば、必ず尊敬されるものである。一道の達人は、必ず尊ばれる。

尊敬を求むる前に、生きることには忠実であり、努力精進して、徳を成就すべきである。

我等はいと小さき存在である。

一世の尊敬の的まなどになる事は出来ないが、「尊敬」する事は出来る。

仏は、拜まれる人であると共に、真に拜む心である。

自分を特別の人間であるかの如く狂信し、盲信して、人を見れば全部阿呆に見えるはじめた時、その人こそ愚の骨頂に立っているのだ。

尊他なき自尊は、自尊ではなくては僣慢である。

自尊なき尊他は、尊他ではなくて、へつらいであり、自卑であり、媚びであり、然らざれば野心を持つ者の手段である。

自尊は尊他によって成就し、尊他は自尊によって生れる。

自尊は自慢にあらず、尊他は屈従にあらず。

尊敬にも、その対象がある。

権力も尊ばれ、財力も敬われる。

何を尊び、何を敬うかによつてその人生が決定する。

名聞利養が生命である人には、真に尊ぶべきものは遂に発見せられない。

尊び、信じ、拝むべき、最後の唯一の真実を発見することが宗教である。

煩惱を超え、雑音を封じ、念仏の心に還る時、何を拝むべきか、何を恭敬すべきかを知らしめられる。

我をして三宝を恭敬し、三宝に帰依して、人生を終らしめよ。

否尽未来際をつくさしめよ。

汝よ、たゞそれだけが、汝の真の生命である。

人物の大小問題にあらず、学の浅深、地位、名利、賢愚等一切問題に非ず。

法然上人曰く「現世の過ぐべき様は、念仏の申されんように過ぐべし。念仏の妨げになりぬべくは何なりともよろづを厭ひ捨て是を止むべし。謂く、聖で申されずば妻を儲けて申すべし。妻を儲けて申されずば、聖で申すべし。住所にて申されずば流行して申すべし。流行して申されずば家に居て申すべし。自力の衣食にて申されずば、他人に助けられて申すべし。他人に助けられて申されずば、自力の衣食にて申すべし。一人して申されずば、同朋と共に申すべし。共行して申されずば、一人寵居いて申すべし。衣食住の三つは、念仏の助業なり。」と。

念仏者こそ、如来を本尊とし、法を食とし、僧に帰依して生かさされるものである。

我、真実念仏者を尊敬す。何となれば、人中の上々人なるが故に。